

《特別報告》

初期アウグスティヌスと自由学芸

— 『書簡 26』収録のリケンティウスの詩を中心に —

水 落 健 治

1 序

紀元 386 年 8 月、キリスト教への回心を経験したアウグスティヌス（以下、Aug. と略記）は、同年 11 月から翌年の 4 月下旬にかけて、ミラノ近郊のカシキアクム（以下、Cas. と略記）にある文法学者ウェレクンドゥスの別荘に滞在し、友人や弟子との対話の中に「世の煩いを離れて哲学に専念する」生活に入った。彼はこの生活の中で、「物体的なものを媒介として、いわば確実に一歩一歩昇って行きながら、非物体的なものにまで到達し、彼らをそこにまで導いて行く」ことを目指し、そのための教科書として、文法学、問答法、修辞学、音楽、幾何学、算術、哲学といった自由学芸の書物を書き始めたことを語っている（*Retr.* 1. 6）。

この「Cas. での自由学芸」に関する研究は、これまでもっぱら Aug. 自身の著作によって行われて来た。すなわち、彼の『告白』における自伝的記述を枠組みとして、「Cas. 対話篇」の記述や、Cas. で書き始められアフリカで完成された『音楽論』などの記述をその枠組みの補完として用いるという仕方で行われて来たのである。

だが、かかる研究方法は、A. v. Harnack が「Aug. の初期著作と『告白』との間に介在する越えがたい溝」を指摘して以来（1888 年）、そのみでは不十分なものと考えざるを得なくなって来ている。

そこで本稿では、Aug. の『書簡 26』に収録されているリケンティウス（以下 Lic. と略記）の詩を採り上げ、これをテキストとして Cas. での自由学芸の内実を探ってみたい。Lic. は Cas. での生活を Aug. と共に送った弟子であり、彼の資料は「Cas. での自由学芸」の研究にこれまでとは異なった光を当てることができると考えられるからである。

2 著者リケンティウスと詩の執筆事情

詩の執筆者である Lic. については、Cas. 対話篇の中に多くのことが語られている。

彼は、トリュゲティウスと同様に Aug. の同郷人で、パトロンであったロマニアヌスの息子であった。音やリズムに敏感であった彼は、情熱的な詩人であり、Cas. では詩や韻律の研究に熱中し、詩篇第 79 篇を、その変則的な韻律が気に入ったがために、朝、洗面所で声高に歌ってモニカにたしなめられたりもした。

Cas. での生活が終わった後、彼は、そこでの Aug. らの薫陶により、自由学芸の学習を始め、キリスト教に触れ、Aug. らがアフリカに戻ってからも（388 年）ミラノに留まって自由学芸の学習を続けた。だがその学習はあまり進歩しなかった。そこで彼は、Cas. での生活から 8 年後（395 年）一篇の詩をアフリカの Aug. に宛てて送り、ウァロの至高の教説が師 Aug. の解釈なしには不明瞭であると述べ、詩の末尾で、Aug. の自由学芸の著作『音楽について』を自らのもとに送ってくれるよう要請した。これがわれわれの見ようとする詩である。

この詩は、ラテン語の古形などを用いたきわめて凝ったもので、その文体は、A. K. Clarke によれば、アレクサンドリアからイタリアにやって来た詩人クラウディアヌス Claudianus (c. 400) の影響を受けたものであった。Clarke は、クラウディアヌスが 395 年以前の数年間ミラノに滞在し、おそらくは Lic. と同じ知識人サークルに属していたことを指摘しているが、もしこの見解が正しいとすると、Lic. は、Aug. がアフリカに帰国した後も詩作の学習を——自由学芸の学習とともに——続け、ミラノの知識人サークルでクラウディアヌスと出会ってみずからの詩作の技法を洗練させていったことになる。

いずれにせよ Lic. の詩は、Cas. から 8 年後の彼がいかなる仕方でも自由学芸や詩作を学んでいたかを示していると同時に、その限りで、彼の自由学芸や詩作の学習の出発点をも示していると考えられる。そしてその記述は、それが Lic. によって書かれたものであるがゆえに、Cas. とそれに続く時代について、Aug. の記述とは異なった側面をわれわれに示してくれると考えられるのである。

まずわれわれは、詩の本文を見ることにしよう。

3 リケンティウスの詩

Lic. の詩は次のように始まる (v. 1~14)。

密やかなる、深みに到るウァロの道を探り求めつつ、
 [わが] 精神はひるみ、おびえて逆光を避けている。
 驚くにもあたらぬ。わが書物への思いは放置されたまま、
 あなたの助けの手なくして、ひとり立ち上がることを恐れている。
 なぜなら、かくも偉大なる人 [ウァロ] の入り組んだ綱要を
 巻き広げ、聖なる思いに到達せよと [わが内なる] 高慢なる愛は説得
 したが、
 かの人は、この思いに数の響きを与え、^{ジュピター} 雷の神のため
 世界が歌い、^{コロス} 一条乱れぬ輪舞を舞っていることを示したものの、
 われらの胸を多様な闇で惑乱させ、
 事物の力が [わが] 魂に雲をもたらしたからだ。
 かくしてわたしは、砂上に描かれたのではない図形の形を
 狂おしくも求め、他の重い闇を打ち碎き、
 星々の位置と明瞭なる軌道を極限まで求める。
 かの人は、それらの座を、雲の合間におぼろげにしか示してくれない
 のだ。

そして自らの窮状を述べ、師 Aug. の援助を求める (v. 22~32)。

だがわたしはあまりにも多大な心労で苦しめられ、
 魂に甘美なるものを、また若干甘美なる食物を求めているのに、
 そのわたしに、ウァロの答えは隠されている。……

……

師よ、すみやかに援助をもたらしたまえ。
 [わが] 弱き力を見捨てることなく、われと共に聖なる土塊を打ち碎
 きたまえ。
 始めたまえ。もし死すべきものがわたしを欺きつつあるものでなければ、
 すでに時が滑り行き、老境へと [わたしを] 引き行くからだ。

そしてその根拠として、師 Aug. の学識をこう賞賛する (v. 36~40)。

というのも、あなたは、おそらく全き仕方では、太陽の長い二十の軌道を
 通って来られたのだからだ。世界のこの上なく美しい理法があなたを
 捉え、
 様々な権能よりも豊かで、いかなるネクタールよりも甘い理法があなたを
 捉え、
 さらに赴こうとするあなたを留め、その中心にあなたを配置したその
 とき、
 あなたはそこから、すべての事物に対して眼差しを向けることができになる。

ついで彼は、過ぎ去った Cas. での日々をこう回顧する (v. 50~58)。

……神はすべてのものに一となれと命じ、
 大祭司たちを諭したもう。その稲妻のごとき予言は人々を恐れさせる。
 もしいにしえの宵が、喜びの戦車もて、あの過ぎ去った日々を
 [Verg. *Aen.* 8. 560]
 わが身に戻してくれるなら。われらがあなたと共に自由な閑暇を過
 し、
 イタリアの只中で、険しい山々を通り抜けつつ、
 清澄なる諸善の法を学んだあの過ぎ去った日々を戻してくれるなら。
 [Verg. *Aen.* 7. 563]
 [かの時には] 辛い荒野が灰白色の冷たさで私を妨げることもなく、
 厳しい西風の時も、響き渡る北風の時も、
 切望に満ちた歩みであなたの足跡を辿り行こうとする私を妨げるこ
 とはなかった。

そして彼は、もし Aug. の援助が得られるなら、新たなる知の営みのため
 にはいかなる知の果てにまでも赴くことを厭わないと語る。スキュタイの
 地、ドナウ下流、ガリアの地、そしてシリア、アンティオキア近郊のカッ
 シウスの山の寂しい頂きにも赴く決意であることを語る (v. 66~68)。

カッシウスの岸壁はドゥレスのそれにも匹敵し、
 われらは、その頂きから、静寂なる東の地を、解き放たれた [日の光

の] 戦車どもを、
沈みゆく陽の光を、いまだ夜の静寂の中にあって見ることができると
いう。

今や Lic. は、かつての生き方を捨て、新たなる精神の旅立ちを始めよう
としている (v. 71~74)。

今私は、ロムルスの子らの座を、空き家となった頂きを、
酒宴の家を、虚しい乱痴気騒ぎを後にした。
今にでも、全身をもってあなたの心の中に入りたいものを。
閨(ねや)に横たわる [わが] 精神が、[わが] 旅立ちを引き止めな
いように。

だがその旅立ちも、Aug. の援助なしには叶わない。Lic. は、Aug. の「贈
り物」が自らのもとに届く前にはみずからにとっての世界の秩序が狂って
しまうと述べる (v. 92~102)。

その前には、鳩は愛しい隠れ家をエーゲの元に築くだろう。
ハルシオンは巣をはるか樹上に作るだろう。
その前には、空腹の牝獅子が柔弱な牡牛を養うだろう。
空腹の狼もまた、従順な子羊を養うだろう。

……

その前には、太陽はテュエステースの食卓の前で日々悪しき仕方であ
れおののき、
立ち止まり、逃げ惑う東の方へと消え失せよう。

……

師よ、あなたの贈り物がわが背後にやって来る、その前には……

Aug. と Lic. の魂は、友愛と学問への情熱によって結びつけられている
(v. 103~110)。

崇敬する友 [あなた] との絆を繋ぎとめ保つもの、それは愛。
こここそ、こここそが、見知らぬ者が姿を消し、友愛の交点が支配す
る場なのだ。

われらが、おのが魂をひとつに繋ぎ留めているのは、水晶のきらめきのためでも、
 黄金の腐食しがたさのためでもない。われらを結びつけたのは、
 ゆえなき民のころがり落ちる運命でも、燃え上がっては人を引き裂く運命でもない。
 否むしろ、内なる読書の丹精と、外なる執筆の仕事、
 はたまた、あなたの魂において見出された高貴なる教示の学説、
 [わが] 答えに反する [あなたの] よき論し——これがわれらを結びつけたのだ。

二人の固い絆は、アルプスの山々を超えてやって来て多くのイタリアの城塞都市を征したハンニバルでさえ、これを打ち砕くことはできない。そしてその根拠として、ふたりが同郷であること、ふたりがキリスト教の信仰によって結ばれていることが述べられる (v. 134~141)。

だがわれらは、一つの都から立ち上がり、
 ひとつの家がわれらを担い、父祖たちのひとつの血によって聖別され、
 キリストへの信仰によって結ばれつつも、
 遙かな道がわれらを隔て [Verg. *Georg.* 4. 480]、架橋には妨げたる広がり
 が
 われらを閉じ込めている。だが愛は、道をも広がりをも、ものともしない。

そして145行以下で、「援助」(v. 29)の内容を具体的に述べ、次のように詩を結ぶ (v. 145~154)。

そうこうする内に、様々な善きものを伴った、
 葉効豊かな言葉の記録が、何であれやって来よう。
 ——そして蜜蜂の巣にも比せられる古のことどもの記録が……
 あなたは思いに沈みつつ、その記録を、深き胸の中で懐胎された甘い蜜として
 光の中へと吐き出したもうた。
 その記録は、あなたの現存をわたしにもたらしてくれる。
 もしあなたがわたしに行くべきことを示し、音楽の女神が理解されて

そこに横たわる書物を [わたしに] 手渡したもうたなら……
 わが身はことごとく、かの書物へと掻き立てられているからだ。
 承諾したまえ、真理が理法によってわれらに現されんことを。
 エリダヌスの川よりもさらに流れんことを。この世の汚染が
 われらが農夫の畑の周りを揺らめくことのないように。

4 リケンティウスの詩から分かること

4.1 リケンティウスの博識

われわれがこの詩を読んでまず気づくことは、詩の中に現れるモチーフの多様さである。

第1に、この詩の中には、ウェルギリウスやオウィディウスからの引用、およびこれらの著作に現れるギリシア・ローマ神話への言及が極めて多い。第2に、この詩の中には地理上の言及が極めて多く、その範囲は、小アジア、南ロシア、アルバニア、シリア、ローマ、ペルシア、カルタゴ、カスピ海、黒海、フェニキア、アルプス、ガリアなど極めて広範囲に及んでいる。第3に、この詩には、第二ポエニ戦争におけるハンニバルの事績などの歴史上の言及もある。第4に、この詩には、エーゲ海に巣を張る鳩、海上で卵を孵すハルシオンなど、多くの生物に関する記述がある。

われわれは、これらの記述を読むとき、作者 Lic. の有している知識の多彩さ・博識に驚かされるとともに、彼がこのような知識をいかにして身につけたのか、という疑問をもつに至る。

この疑問については、詩の 65~68 行に現れる「カッシウスの山」の記述がその手掛りを与えてくれる。この箇所は、シリア、アンティオキア近郊の高山カッシウスの頂きが余りに高いため、明け方の 3~6 時になると、一方に夜の闇を、他方に日の出の光を見ることができるといふ言い伝えを歌っているのであるが、この記述は明らかに、プリニウス『博物誌』5.18.80 を典拠としている。加えて、昨今の研究によれば、プリニウスは『博物誌』のかなりの部分をウァロに基づいて執筆した。

かくしてわれわれは、Lic. がこれらの知識を身につけた源泉をウァロ、ないしウァロを典拠として執筆されたプリニウスに求めることができる。そして Lic. が詩の冒頭でウァロの名前を引用しているという事実からすると、Lic. がこれらの知識をウァロから学んだ可能性も極めて高いと考えなければならない。ウァロの著作の殆どは現在失われているが、彼が古代唯一の博識家であったという事実からすると、ウァロの失われた著作の中

には、この詩で述べられているような博物誌的記述がかなりあったと推測される。加えて、Aug. と同時代にウァロに基づいて執筆されたマルティアヌス・カペラ『フィロロギアとメルクリウスの結婚』の第6巻「幾何学」の記述のほとんどが博物誌的・地理学的記述であるという事実を勘案するなら、

Lic. はこの詩で、自らがウァロの幾何学の書物から学んだ博物誌的・地理学的知識を、
師 Aug. に披瀝している

と考えて間違いはないであろう。

4.2 カシキアムで探求された学問

第2に、Lic. の詩は、Cas. で行われた自由学芸を媒介とした知的探求のプログラムについて、Aug. の著作には述べられていないことがらを教えてくれる。

1. 第1行「密やかなる」と訳された *arcanus* という語は、「公衆の眼から隠された、秘教的な、秘密の」といった含みをもつ語である。したがって、この語は、この後に現れる「聖なる思いに数を与え」(v. 7)、「世界が歌い」(v. 8)、「一糸乱れぬ輪舞コロスを舞って」(v. 8)、などを勘案すると、算術の主要な内容をなしていたピュタゴラス派の説であろうと推察される。
2. 第11行「砂上に描かれたのではない図形の形」は、当時の教師がアリストテレスの四種の定言命題の相互関係を説明したり、幾何学の証明を行う際に用いていた図形が砂の上に描かれたことを踏まえている。Lic. は、ウァロの著作を読んで、かかる砂上の図形を超えた「イデア的図形」を求めようになった。
3. 第13行「星々の位置と明瞭なる軌道」は、天文学を意味している。
4. したがって、Lic. がここで言及している学科は、算術、論理学、幾何学、天文学であると考えられる。
5. さらに、Lic. が詩作に熱中していたという Aug. の記述からして、Cas. では文法学や修辞学、音楽が学ばれていたことも十分推測できる。

以上を要約すれば、Cas. では自由学芸のほぼすべての学科が種々雑多な博物誌的知識と渾然一体となって学ばれていた、ということになるだろう。

4.3 カシキアムでの生活

第3に、この詩には、Lic. の眼から見た Cas. での生活が生き生きと回顧されている。v. 52~58 の表現からすると、Lic. にとって「Cas. での学問探求は困難なものであったが、参加者たちの学への情熱と思慕がそれらの困難を乗り越えさせた」と考えられていた。

では、ここでの具体的生活はいかなるものであったのか。v. 108~110 にそれが述べられている。

- ・「内なるものを読み解こうとする労働」*labor interiora legens* (v. 108)
- ・「外なる執筆の仕事」*vulgata libellis* (v. 108)
- ・「あなた (Aug.) の魂において見出された高貴なる教示の学説 *animis inventa tuis, et nobile dogma* (v. 109)
- ・「わが」答えに反する「あなたの」よき論し *contraque bonus responsa relatus* (v. 110)

Cas. に集まった Aug. とその友人・弟子たちは、難解なウァロの著作を読み、その隠された内実を解き明かし、それを外的な仕方でも執筆しようとしていた。そして Lic. らが誤った結論を導き出すと、Aug. がそれを訂正した。

このような Cas. での活動内容を勘案すると、Aug. が Retr. 1. 6 で語っている「Cas. で書き始めた自由学芸の書物」は、参加者たちのこのような活動の中で執筆された「ウァロの自由学芸の書物に対する註解」であったと考えられる。

4.4 リケンティウスにとっての自由学芸

第4に、この詩の中には、Cas. での自由学芸の学習が Lic. にいかなる影響を及ぼしたかが述べられている。

v. 71~74 では、Lic. のかつての精神のあり方が、「ロムルスの子らの座」、「空き家となった頂き」、「酒宴の家」、「虚しい乱痴気騒ぎ」、売春婦の「閨(ねや)」と表現され、みずからがすでにそこを後にしたことが述べられる。

もしこれらの表象が伝統的ローマ文化を示すものであるとするなら、Lic. は、Cas. での自由学芸の学習によって、伝統的ローマ文化への埋没

状態から決別し「新たな精神の旅立ち」をしたのだと考えられる。そしてその旅立ちには、何らかの仕方で「キリストの信仰」christiana fides (v. 139) が関わっていたと考えるのが至当であろう。

4.5 知的・学問的探求とキリスト教信仰

ではこの「キリストの信仰」はどのようなものだったのか。われわれがこの詩を読んでまず感じることは、

Lic. において「キリストの信仰」は、ギリシア・ローマ神話と結合した豊穡な表象の中で捉えられている

ということであろう。そしてわれわれは、このような眼で改めてこの詩を読み直すとき、「世界のこの上ない理法」ratio pulchrimma mundi (v. 37) といったストア派にも通ずる表現や、新プラトン主義を想起させる「神は万物に一になれと命じ」Deus imperat omnibus unum (v. 50) という表現もまた、哲学的表現としては自覚されないままで用いられていることに気付かされる。つまり Lic. においては

ストア派や新プラトン主義などのいわゆるギリシア哲学も、ギリシア・ローマ神話と不可分な形で結合していた

と考えられるのである。

以上を要約すれば次のようになるだろう。

Lic. においては、哲学的学問探求もキリスト教信仰も、ギリシア・ローマ神話の豊穡な表象の中で渾然一体の形で捉えられていた。

5 アウグスティヌス『書簡 26』

5.1 アウグスティヌスの返信

紀元 395 年、Aug. は Lic. の詩を受け取った。だが Aug. は『音楽について』を彼に送らなかった。そしてその代わりに、極めて悲痛な一通の書簡を彼に送った。これが Aug. の『書簡 26』である。

Aug. 書簡集の『書簡 26』の中に Lic. の詩が収録されているという事実からすると、Aug. は Lic. の詩をこの書簡と共に突き返した可能性が高い

と考えられる。そして両者を受け取った Lic. は、これらを見ずからにとって「大切なもの」として保管した。だからこそこれらは保存され、Aug. 書簡集の編纂の際に書簡集に組み入れられたのではないか。

以下、『書簡 26』の文面を書き抜いてみる。

1. わがりケンティウス、あなたは少しずつ、知恵の絆から退きそれを恐れています。私は、あなたが、この上なく強く危険な仕方で死すべき事柄に繋がれていることを危惧しています。(n. 2)
2. あなたの手紙にあった幾つかの言葉は私を困惑させました。ですが私は、それらについて論ずることは相応しくないと考えました。あなたの行いと生活全般についての心配が沸き立っているからです。(n. 2)
3. もしあなたの詩句が韻律の不調和によって歪んでいたとしたら、自らの規則で成り立っていなかったら、不均衡な比率で聴き手の耳を撃つとしたら、あなたは必ずや恥じ入り、躊躇したり中断することなく、みずからの詩句を秩序あるものにし、訂正し、並べ、均等なものにすることでしょう、この上なく激しい熱心さと勤勉さで韻律の学を学び、実行することによってそうすることでしょう。しかし、あなた自身が無秩序で歪んでいたならどうでしょうか。…… (n. 4)
4. 私は [あなたの] 黄金の言葉と鉄の心をどうしたらよいのでしょうか。どんな歌によって、否、嘆きによって私はあなたの歌を撃つことができるのでしょうか。(n. 4)
5. あなたは神から、金のごとき霊の才能を授かりました。そしてそれをもって欲望に仕えています。そしてその中で、あなた自身をサタンに飲ませているのです。お願いします。どうかそのようなことはしないでください。私がどれほど哀れな、あなたを憐れむ胸中でこれを書いているか、いつの日かあなたは分かってくれるでしょう。もしあなたが落胆するなら、どうか私のことを思ってください。(n.6)

5.2 アウグスティヌスに衝撃を与えたもの

これらの言葉を読むと、送られてきた Lic. の詩は Aug. に相当の衝撃を与えたことが分かる。書簡は一貫して悲痛な調子に貫かれ、Aug. が愛弟子 Lic. の生き方を心配している様子がひしひしと伝わって来る。では何

がこれほどまでに衝撃を与えたのか。

5.2.1 詩の中に現れる異教作家の引用, 異教的モチーフ

まず考えられるのは, Lic. が詩の中に異教作家のテキストや異教神話のモチーフを無数に挿入しているという事実に, キリスト教徒であった Aug. が当惑した, という可能性である。

しかしこの可能性は, ギリシア・ローマの宗教・文化とキリスト教のそれとを峻別する近代人にとっては説得力をもつにしても, 古代人 Aug. がそのように考えていた可能性はまずないと考えられる。ギリシア・ローマの古典・神話は, 古代人にとっては教養の前提であり, 空気のようなものだったからである。そして事実, 最晩年(428年)の Aug. も, 異教の修辞学にかぶれている息子に手を焼いた父親からの訴えに対し, 「Cato と Cicero を読ませなさい」と進言し, 異教作家の積極的効用を認めているのである。

5.2.2 詩の中に現れるリケンティウスの博識

第2に考えられるのは, Lic. が詩の中でキリスト教的「知恵」をではなく, 自らの「博識」を披瀝し, これが Aug. を困惑させた, という可能性である。

この可能性は, プラトンのアカデメイアとイソクラテスの修辞学校との対立以来の歴史を踏まえているが, Aug. に即して考えてみると現実性に乏しい。確かに回心前の Aug. は「博識」(自由学芸)の世界に生きていた。そしてプロティノスを読むことによって, 博識とは別の「知恵」の世界を知った。しかし, だからと言って, 彼が「博識不要論」を唱えたと考えるのは現実的ではないであろう。事実彼が後年執筆した『神の国』は膨大な「博識」なしには執筆不可能であり, Aug. 自身, 博識の必要性を認識していなかったとは考えにくい。

5.2.3 リケンティウスの抱える倫理的問題

では, Aug. は Lic. の詩のどこにこれほどまでの衝撃を受けたのであろうか。この問題意識をもって改めて Aug. の言葉を見ると, まず上記3.(下線部)の言葉から, Aug. の衝撃が Lic. の倫理的行状に関わることでないかとの予想が出てくる。そして2.の言葉から, Aug. に衝撃を与えた「言葉」が詩の中に現れていることが分かる。

そこでかかる観点から Lic. の詩を見なおしてみると、われわれは次のような微妙な表現を見出すのである。

今私は、ロムルスの子らの座を、空き家となった頂きを、
 酒宴の家を、虚しい乱痴気騒ぎを後にした。
 今にでも、全身をもってあなたの心の中に入りたいものを。
 閨（ねや）に横たわる [わが] 精神が、[わが] 旅立ちを引き止めないように。(v. 71-74)

Fischer は、v. 74 の「(売春婦の) 閨（ねや）」が Lic. の現在の生活の姿を示しておりこれが Aug. に衝撃を与えた、と考えている。だが、この表現が比喩であることからすると、筆者にはこの説は受け入れがたい。筆者には、その前行の

今にでも、全身をもってあなたの心の中に入りたいものを

が微妙なニュアンス (Lic. の Aug. に対する「同性愛的思慕」) をもっていたのではないかという気もするが、確実な所は分からない。上記引用 4. の下線部「黄金の言葉と鉄の心」の「鉄」のモチーフを文学史的に検討したら何かが見えてくるかもしれない気もしている。いずれにせよ、Lic. の抱える倫理的問題が Aug. に衝撃を与えたことは事実であろう。

6 エピローグ——その後のリケンティウス

この書簡を受け取って以来の Lic. の生涯についてはほとんどわからない。P. Brown は、その後の Lic. が異教文化とキリスト教徒の間で揺れ動き、異教徒の元老院議員の支援を受けたことを語っている。だが彼は、はたしてキリスト教徒になったのだろうか。

かつてどこかで読んだ話なのだが、ヨーロッパのどこかに Lic. という名前の書かれた墓があって、その墓碑銘には「キリスト教徒」と書かれているという。これがもし Aug. の弟子の Lic. であるとするとは様々な可能性が思い浮かんで来る。

まず思うのは、その後の Lic. にとって自らが書いた詩と Aug. の書簡は宝物になっただろうということだ。だからこそこれは大事に保管され、Aug. 書簡集に組み入れられることになったのではないか。

次に思うのは、その後の Lic. の生涯は、Aug. が『告白』で書いているそれにも匹敵する波乱万丈なものになったのではないか、ということだ。

もし Lic. の『告白』が書かれていたら……だがこのような想像は到底叶わぬ夢なのだが。